

研究ノート

奈良県所在の西国三十三所観音巡礼霊場の立地と眺望景観

Location and View of the Four Buddhist Temples in Nara Prefecture
of the Thirty-three Kannon Pilgrimage Sites in Saigoku小野健吉*
ONO Kenkichi

Of the thirty-three Kannon pilgrimage sites in Saigoku (Western Japan), four are located in Nara Prefecture: Minami-hokke-ji Temple (Tsubosaka-dera Temple) at No. 6, Oka-dera Temple at No. 7, Hase-dera Temple at No. 8, and Nan'endo Hall of Kofuku-ji Temple at No. 9. The author has pointed out that many of the Buddhist temples and halls of the thirty-three Kannon pilgrimage sites are located on mountainsides, and that this is thought to be based on the descriptions of the residence of Kannon in Mt. Potalaka in *Avatamsaka Sutra* and *Great Tang Records on the Western Regions*. In this paper, it is confirmed through field surveys that the above-mentioned four temples in Nara Prefecture also match the image of the residence of Kannon in Mt. Potalaka in terms of location, view, water landscape and so on.

キーワード：西国三十三所観音霊場巡礼（Kannon pilgrimage of thirty-three sites in Saigoku） 補陀洛山（Mt. Potalaka）
観音菩薩（Kannon Bosatsu） 眺望景観（view）

1. はじめに

西国三十三所観音霊場巡礼は、文化庁による文化財活用施策である「日本遺産」に認定され、日本独自の文化遺産として観光的にも注目を集めている。この巡礼は、観音菩薩を本尊とする近畿二府四県（和歌山・大阪・奈良・京都・兵庫・滋賀）と岐阜県所在の三十三の寺院や仏堂をめぐるもので、その起源は 8 世紀に遡ると伝えられる。15 世紀頃には現在の番付での巡礼が広まり、江戸時代になると日本各地から巡礼者が訪れるようになる。江戸時代の巡礼は信仰に基づく宗教行為である一方、庶民の旅行に対し厳しい制限がかけられるなかで許容された寺社参拝の一つとして観光の側面を伴っていた。そうした観光の側面から考えると、本尊である観音菩薩像が秘仏となっていることも多いなか、寺院境内の景観あるいは寺院境内からの眺望景観は、当時においても現在においてもきわめて重要な要素である。

一般に観音菩薩を本尊とする寺院や仏堂は、多くが『華嚴経』や『大唐西域記』に記述される補陀洛山の観音菩薩居所のイメージで立地が選択されていると見られ、結果として優れた眺望景観を有している場合が多い。筆者は、西国三十三所観音霊場のうち第一番・青岸渡寺（和歌山県那智勝浦町）、第二番・金剛宝寺護国院（紀三井寺）（和歌山市）、第三番・粉河寺（和歌山県紀の川市）の立地・地形・境内景観等に関する考察を行い、それらに補陀洛山のイメージと合致する部分があることを明らかにした（小野 2023、小野 2024）。さらに第十六番・清水寺（京都市）、第十四番・園城寺（三井寺）観音堂（滋賀県大津市）、第三十番・宝厳寺観音堂（滋賀県長浜市）についても、同様の考察を別途行っている（小野 2025）。本稿では、奈良県所在の第六番・南法華寺（壺阪寺）（高取町）、第七番・岡寺（明日香村）、第八番・長谷寺（桜井市）、第九番・興福寺南門堂（奈良市）について、現地調査により立地・眺望景観・水環境等を確認し、これらと補陀洛山イメージとの関連を明らかにすることを目的とする。なお、日本における観音信仰等については、先行研究（速水 2000、清水 2008、神野 2010、佐久間 2015）を基に前稿（小野 2024）で示したので繰り返さないが、『華嚴経』や『大唐西域記』の補陀洛山の観音居所に関する記述のとりまとめについては、次章の記述とも関連するので、以下に再掲しておく。

『華嚴経』（八十卷本）によれば、補陀洛山は南方に立地し、海上に屹立する山であって、観音菩薩の居所となるのは、その西山腹の窪地または巖谷である。そこには泉・流水・池沼など豊かな水があり、その水を基盤に果樹・花樹が林をなし、地上は柔らかな香草に覆われていると記される。一方、『大唐西域記』では、補陀洛山は南インドの「秣羅矩吒国」の海から遠くないところにある山で、峻険なその山に登るのはたいへん困難

* 大阪観光大学観光学部/ 日本庭園史

であるが、山頂には清澄な池があり、池から流れ出した水は大河となり山を 20 周廻って海まで下っている。観音菩薩の居所となるのは山頂の池の畔にある石の宮殿である、と記される。

2. 奈良県所在の西国三十三所観音霊場：南法華寺・岡寺・長谷寺・興福寺南円堂

(1) 南法華寺（壺阪寺）

南法華寺（奈良県高市郡高取町）は西国三十三所観音霊場巡礼の第六番札所で、本尊は十一面千手観音菩薩坐像。正式名称を壺阪山平等王院南法華寺といい、壺阪寺と通称される。その創建については諸説あるが、旧塔婆心礎舍利穴や出土瓦から、文武天皇（在位 697-707）の時代の創建と考えられる（大矢 1988）。承和十四年（847）に長谷寺とともに定額寺に列せられ、京都の貴族からも尊崇された。藤原道長は、寛弘四年（1007）八月六日、金峯山参詣の途中でここ壺阪寺に参詣し宿泊したことを『御堂関白記』に記している。また、『枕草子』のいわゆる「物尽くし」の段の一つである第一九七段に「寺は壺坂、笠置、法輪。霊山は、釈迦仏の御すみかなるが、あはれなるなり。石山、粉河、志賀。」とあり、清少納言は好みの寺の筆頭に壺阪寺を挙げている。嘉保三年（1096）に本堂・礼堂・五大堂など伽藍の大半を焼失し程なく復興するも、承元元年（1207）にまたも焼失にあったとの記録が残る。中世になると、興福寺一乗院の末寺となり観音霊場として民衆からの信仰を集めたが、関係の深かった当地の豪族・越智氏の滅亡に伴って室町時代末には衰退した。江戸時代になると、徳川幕府の庇護を受けるとともに、高取城主となった本多氏・植村氏により堂舎の修復が行われた。現存する堂舎のうち、本堂（八角円堂）は江戸時代末期の再建。三重塔は明応六年（1497）の再建で重要文化財、本堂前の礼堂も江戸時代中期に大修理を受けているものの、その建立は三重塔と同時期とみられ重要文化財となっている（写真-1）。

伽藍は、後世に高取城が築かれる高取山（標高 593m）の西に連なる壺阪山の西山腹、標高 300m 前後の場所に展開する（図-1、写真-2）。周囲を照葉樹林で囲まれた境内から北西方を望むと、近景の低山越しに中景として飛鳥盆地、さらに遠方に二上山やその南に連なる金剛・葛城山系が見渡せる（写真-3）。いまは境内に顕著な水流等は見られないが、「岩をたて 水をたたえて 壺阪の 庭のいさごも 浄土なるらん」の御詠歌からうかがえるように、元来は山からの湧水も豊かであったものとみられる。壺阪山の西山腹の立地、その立地に基づく眺望景観と水の豊かさや周辺の樹林は、『華嚴経』や『大唐西域記』に記述された補陀洛山にある観音菩薩の居所を彷彿させるものといえてよいだろう。

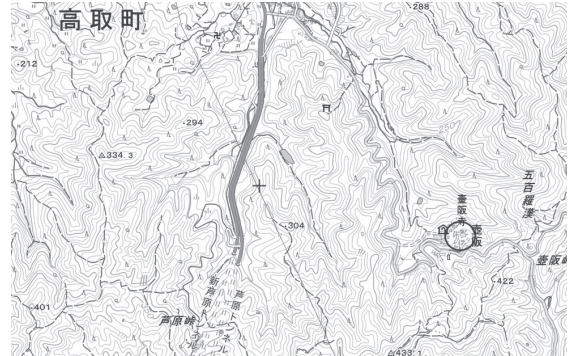


図-1 南法華寺地形図（地理院地図 電子国土 Web）



写真-1 礼堂（左）と八角円堂（右）（筆者撮影）



写真-2 南法華寺境内（筆者撮影）



写真-3 南法華寺から西方を望む（筆者撮影）

(2)岡寺

岡寺（奈良県高市郡明日香村）は西国三十三所観音霊場巡礼の第七番札所で、本尊は奈良時代末期制作の塑像である如意輪観音菩薩坐像。正式名称は東光山真珠院龍蓋寺であるが、地名にちなんだ岡寺の呼称が通用している。その創建は七世紀末から八世紀の第 1 四半期頃で、僧・義淵（?～728）により国家隆泰・藤原氏栄昌のため草壁皇子の居所であった岡宮跡に建立されたものと考えられている。また、創建時の伽藍は、礎石の存在や古瓦の出土から、現在の岡寺の西に隣接する治田神社付近に所在していたと見られる（福山 1980）。創建当初から興福寺の末寺であったが、江戸時代中期からは真言宗豊山派・長谷寺の末寺となる。この間、平安時代末期以降は西国三十三所観音霊場巡礼の札所として信仰を集めた。江戸時代になると多くの巡礼者で賑わい、本居宣長はその様子を「男女おいたるわかき、数もしらずもうでこみて、すきまなくみなみて、御詠歌とかやいふ歌を、大声どもしぼりあげつつ、…」(『菅笠日記』明和九年（1772）三月十一日)と記している。

岡寺の伽藍は、飛鳥盆地の東に連なる最高標高 500m ほどの山並みの西山麓、微地形的には谷地形となる標高 170～190m の傾斜地に複数の平坦地を造成した境内に展開する（図-2）。また、創建時の伽藍跡と考えられる前述の治田神社は、現在の境内地の北部から西方に張り出した標高 170m ほどの小さな尾根上に立地する。こうした立地により、周囲を照葉樹林で囲まれた岡寺境内からは、飛鳥盆地や大和三山のひとつである畝傍山、さらに遠方の二上山や金剛・葛城山系の山々が眺望できる（写真-4）。また、現在の境内地に顕著な水流等は認められないが、南面する本堂（写真-5）の前面には山号の由来ともなっている「龍蓋池」があり（写真-6）、この池は谷地形を伏流する水を水源とするものと考えられる。こうしたことから、岡寺の境内地は、治田神社境内も含め、本来的に水の豊かさが感じられる場所であったことが窺える。眺望景觀に優れ、水に恵まれた立地であったればこそ、飛鳥時代に草壁皇子の居所ともなっていたのだろう。そして、こうした立地に基づく眺望景觀と水環境さらに緑豊かな環境は、『華嚴經』や『大唐西域記』に記述される補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージと合致するものと見なすことができる。

(3)長谷寺

長谷寺（奈良県桜井市）は西国三十三所観音霊場巡礼の第八番札所で、本尊は十一面観音菩薩立像。正式名称は豊山神楽院長谷寺で、真言宗豊山派の本山である。古来の初瀬山岳信仰の地における長谷寺の創建については、飛鳥時代の天武朝創建説など諸説あるが、僧・道明が養老四年

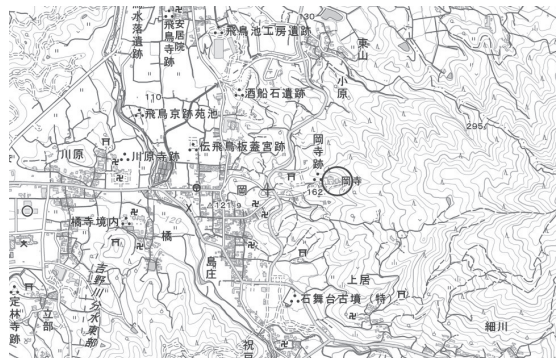


図-2 岡寺地形図（地理院地図 電子国土 Web）



写真-4 岡寺から畝傍山・二上山（筆者撮影）



写真-5 岡寺本堂（筆者撮影）

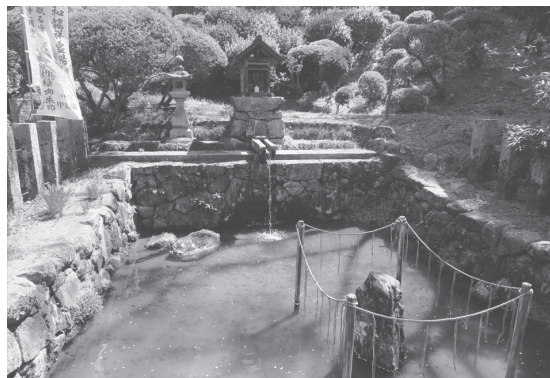


写真-6 岡寺龍蓋池（筆者撮影）

(720)～神亀四年(727)頃に十一面観音の造立を中心とする造営が行なわれたと見るのが妥当と考えられる(達1990)。平安時代になると、現世利益を祈願する観音信仰が京都の貴族の間に広まるのにもない長谷寺詣でが盛んとなる。とりわけ注目すべきは女性による信仰で、『源氏物語』の玉鬘の巻や『枕草子』の二一四段のほか、藤原道綱母の『蜻蛉日記』や菅原孝標女の『更級日記』にも初瀬詣で(長谷詣で)が記されている。平安時代末から中世にかけては、西国三十三所観音霊場巡礼の札所として、武家や商人、さらに庶民の信仰を集める。室町時代末には戦乱により衰微するが、豊臣秀吉の寄進により復興。江戸時代に入っても幕府の庇護のもと寺勢は盛んで、多くの参詣者を集めた。なお、現在の本尊十一面観音菩薩立像は天文七年(1538)の復興像で、この本尊を祀る正堂と懸造りの舞台をともなう礼堂からなる本堂は、慶安三年(1750)の竣工である。本居宣長は、長谷寺参拝の様子を『菅笠日記』明和九年(1772)三月七日条に、「さて御堂に参らんとて出で発つ。先づ門を入りて、呉橋を登らんとする所に、誰がことかは知らねど、道明の塔とて、右の方にあり。やや登りて、肘折る所に、貫之の軒端の梅と言ふもあり。又蔵王堂産霊の神の祠など、並び建てり。此处より上を、雲居坂と言ふとかや。かくて御堂に参り着きたるに、折りしも御帳掲げたるほどにて、いと大きな本尊の、きらきらしうて見え給へる。人も拝めば、我も伏し拝む。さて此处かしこ見廻るに、此の山の花、大方の盛りはやや過ぎにたれど、なほ盛りなるも、ところどころに多かりけり。」と記している。

長谷寺の伽藍は、初瀬山(548m)から東南方向に伸び初瀬川に至る尾根状地形の山腹、樹林に覆われた標高160～230m前後の傾斜地を巧みに造成した広大な境内に展開する(図-3)。門前町から境内に入って階段を上った先に仁王門があり、そこからは屈曲しながら高低差約40mの斜面を上る登廊(写真-7)で本堂に至る。本堂は西南が谷地形となった尾根上に南面して建つ(写真-8)。本堂の南面は礼堂の舞台となっており、この舞台から南方には境内の諸堂と初瀬川対岸の山々に囲まれた小空間が一望できる(写真-9)。ちなみに、泊瀬(初瀬)にかかる「こもりく(隠口)」という枕詞には、山々に囲まれた別世界というイメージが漂う。また、境内に顕著な水流や池などは見られないが、境内の東および南を流れる初瀬川が長谷寺を巡る水環境として特筆される。山腹の切り立った崖地に立地する長谷寺本堂は、緑豊かな山々に囲われ初瀬川が流れ下る異界的な小空間を支配する眺望景観を持つことと合わせて、『華嚴経』や『大唐西域記』に記述される補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージと重なる部分



図-3 長谷寺地形図(地理院地図 電子国土 Web)



写真-7 長谷寺登廊(筆者撮影)



写真-8 長谷寺本堂(筆者撮影)



写真-9 長谷寺本堂の舞台から初瀬川方面(筆者撮影)

を指摘することが可能であろう。

(4)興福寺南円堂

興福寺（奈良市）は、飛鳥時代創建の山階寺に始まり藤原京の厩坂寺を経て、平城遷都の際に春日山麓に続く春日野台地の西端の現在地に遷されて「興福寺」と改称したと伝える。ただし、伽藍が概ね完成を見たのは奈良時代中期頃で、主要伽藍の南の一段低い南花園にある猿沢池も放生池としてこの頃に整備された。興福寺は、もともと藤原氏の氏寺であったが、養老四年（720）には官寺となり、平安時代には南都七大寺のひとつに数えられた。平安時代後期になると、藤原摂関家との深い関係のもと春日社と一体化して大和一国の支配を進めるようになり、治承四年（1180）の平氏による南都焼討ちで焼亡するものの短期間で復興を果たした。鎌倉時代には幕府から大和守護職を委ねられ、室町時代にも大和守護職として大きな勢力を誇ったが、その後半には戦乱の中で衰微することとなる。江戸時代になると徳川將軍家の庇護のもとで復興を果たすが、享保二年（1717）には金堂・講堂・僧房・西金堂・南円堂・中門・南大門が焼失し、大きな打撃を受ける。この伽藍焼失後に一番早く復興したのは南円堂であった（永島 1985）。これは南円堂が西国三十三所第九番札所となっていたことによるもので、このことから当時の西国三十三所巡礼の盛行が窺える。

南円堂（写真-10）は、弘仁四年（813）に藤原冬嗣が建立した八角円堂で、本尊は不空羂索観音菩薩坐像。養老五年（721）に完成した北円堂に対する堂で、同じ八角円堂であるが、北円堂より一回り大きい。その位置は本来的に西金堂に附属する西塔の位置であるが、本尊が観音菩薩であることから、眼下に見る猿沢池の存在も考慮に入れた選地であった可能性を指摘しておきたい。なお、現在の建物は、前述の享保焼失後に再建された創建後四度目の建物となる。

南円堂が建つのは春日野台地西南端にあたる興福寺境内南西部の標高約 95m の地点で、地形的に西と南は急傾斜で低くなっている（図-4）。すぐ南に位置する猿沢池は標高約 85m で、南円堂とは約 10m の標高差がある（写真-11）。すなわち、南円堂は、西と南への眺望が開けた台地先端の高所にあり、しかも南には観念的に海の表象ともみなし得る猿沢池を間近に見下ろす立地である（写真-12）。また、東方には、立ち並ぶ堂舎越しに樹林に覆われた春日連山が視界に入る。こうした立地・環境は、南円堂が創建当初から観音菩薩を本尊としていたことに鑑みると、『華嚴経』や『大唐西域記』に記述される補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージを意識した選地であったと見ることが可能であろう。



図-4 興福寺南円堂地形図（地理院地図 電子国土 Web）



写真-10 興福寺南円堂（筆者撮影）



写真-11 猿沢池畔から階段で上る南円堂（筆者撮影）



写真-12 猿沢池と南円堂（左上）（筆者撮影）

3. まとめ

前章では、奈良県所在の 4 カ所の西国三十三所観音霊場、すなわち南法華寺・岡寺・長谷寺・興福寺南円堂について、その立地・地形・環境について、現地調査を基に経典等に記される補陀洛山のイメージとの比較対照を行ない、各々で以下の結果を得た。

- ・南法華寺：壺阪山の西山腹の立地と飛鳥盆地や二上山方面への眺望景観、その立地に由来する本来的な水の豊かさや植生の豊かさは、補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージに適うものと言える。

- ・岡寺：明日香盆地に東から張り出す丘陵の西山腹という立地と飛鳥盆地・畝傍山や二上山方面への眺望景観、「龍蓋池」から窺える豊かな水環境や植生の豊かさは、補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージに適うものと言える。

- ・長谷寺：初瀬山から東南方向に伸びる尾根状地形山腹に立地する本堂南面の礼堂舞台からは境内諸堂と初瀬川対岸の山々に囲まれた小空間が一望できる。初瀬川の存在も含め、立地・水環境や境内と周辺の山々の緑の豊かさは、補陀洛山の観音菩薩の居所を想起させる。

- ・興福寺南円堂：春日野台地の西南端の西と南への眺望が開けた場所に建つ南円堂は、海の表象とみなし得る南の猿沢池を眼下に見下ろすことなどから、補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージに適うものと言える。

以上の通り、筆者がこれまでに取り扱った青岸渡寺・紀三井寺などと同様に、奈良県所在の西国三十三所観音霊場である南法華寺・岡寺・長谷寺・興福寺南円堂の立地・眺望景観・水環境等も、補陀洛山の観音菩薩の居所のイメージとよく合致したものであるということが出来る。このことによる寺院境内の景観あるいは寺院境内からの眺望景観は、観光の観点からも大きな魅力と見なすことができ、宗教観光の枠組みを超えた観光資源として位置づけるよりどころになる。今後、観音菩薩の慈悲の心という観音信仰本来の価値付けとあわせて、この点を積極的に発信していくことにより、観光資源としてより多くの人々の来訪が期待できるものと考えている。

【文献】

- 大矢良哲（1988）「つばさかでら 壺阪寺」『国史大辞典 9』吉川弘文館 pp.805-806
- 小野健吉（2023）「名勝粉河寺庭園の作庭位置・意匠の含意と策定の目的についての試論」『和歌山県文化財センター研究紀要』創刊号 wabunse.or.jp/publication/bulletin/files/01/1-3_ono.pdf
- 小野健吉（2024）「観音霊場としての青岸渡寺と紀三井寺の立地・地形に関する考察」『和歌山県文化財センター研究紀要』第 2 号 www.wabunse.or.jp/publication/bulletin/files/02/2-3_ono.pdf
- 小野健吉（2025）「眺望観光資源としての西国三十三所観音霊場巡礼札所－清水寺・園城寺観音堂・宝厳寺観音堂－」『観光学』第 32 号（掲載予定） 和歌山大学観光学会
- 神野富一（2010）『補陀洛信仰の研究』山喜房佛書林
- 佐久間留理子（2015）『観音菩薩』春秋社
- 清水健（2008）「西国三十三所一観音霊場の祈りと美一」『西国三十三所 観音霊場の祈りと美 展覧会図録』pp.214-227 奈良国立博物館
- 達日出典（1990）「はせでら 長谷寺」『国史大辞典 11』吉川弘文館 pp.558-559
- 永島福太郎（1985）「なんえんどう 南円堂」『国史大辞典 5』吉川弘文館 pp.495-496
- 速水侑（2000）「観音信仰のあゆみ」『観音信仰事典』pp.44-73 戎光祥出版
- 福山敏男（1980）「おかでら 岡寺」『国史大辞典 2』吉川弘文館 p.748

【ウェブサイト】

日本遺産ポータルサイト 1300 年続く終活の旅～西国三十三所観音巡礼～：

<https://japan-heritage.bunka.go.jp/ja/stories/story074/> 2024 年 11 月 29 日最終閲覧

地理院地図（電子国土 Web）

<https://maps.gsi.go.jp/#8/35.421790/136.144542/&base=std&ls=std&disp=1&vs=c1g1j0h0k0l0u0t0z0r0s0m0f1>

2024 年 11 月 29 日最終閲覧